

ぼくちゃん、 涙の数だけ生きるのよ。

兵庫県
社会福祉法人神戸老人ホーム ケアハウスゆうあい

中島圭佑さん

あなたは私を「ぼくちゃん」と呼んだね。いつも「ほっほっほ」と笑うあなたに私はいつも安らぎを貰っていたよ。あなたの事、忘れないからね。ありがとう。

あなたとの出会いは仕事を始めて6年目。日々の仕事に汗を流している頃。あなたは退院し、私の働く施設にやってきた。心臓が悪く、寝たきりで、生活の全てにおいて介助が必要な状態。私たちは体調に細心の注意を払ってケアを行った。その中でも職員が毎日明るく他愛もない話題で話かけた。あなたは、その時も何も話さず、ずっと目を閉じていた。

しかし、1カ月が過ぎたある日の出来事だった。私がある日の部屋で食事の片付けをしている時に、突然「ねえ、ぼくちゃん」と声が聞こえた。私は驚いて思わず3度見をした。その声は間

違いなくあなたからのもので、私は近くにいき声をかけた。するとあなたは、「ぼくちゃん、私のお腹がすいた、ほっほっほ」と声を出した。私は嬉しくてたくさん話し掛けた。

その瞬間から私たち介護職員と、あなた、家族様との新たな日々が始まった。あなたはどんどん元気を取り戻し、介護職員も諦めずに様々なアプローチを行った。3ヶ月が過ぎるころには、普通食を自分で食べ、手を持って歩き、折り紙も折れる程になった。医師も眼を丸くして「どういふことかさっぱり分からない。健康的にも問題ない、むしろ120点です。」と話す程であった。家族様も「もうこんな姿は見るのができないと思っていました。」と涙を流され笑顔であったとお話をされていた。

4月のある日、私が夜勤の時、

あなたは言った。「ねえぼくちゃん、桜を見に行きましょう。」と。私は「そうですね。明日晴れたら行きましょう。」と答えた。すると「違うよ、桜は夜に見る物よ!」とあなたは言った。私はルールもあるため、断っていたが、最後に「来年は見える保証はないのよ、ほっほっほ。」と言われた為、断る理由が思いつかなかった。私とあなたはこっそりベランダに出て満開の桜を見ながら話した。

その時の話を私は一生忘れない。

「ぼくちゃん、あなたは本当に良い子だね。ぼくちゃんには明るい将来を送ってほしいのよ。辛い時はたくさん泣きなさい、涙の数だけ人間は生きる意味が生まれるのよ。私は最期にあなたに会えたことが嬉しいから涙を流すことにする。」

私は隠れて泣いた。その数日前からあなたは体調を崩し、食事が摂れなくなり、医師からも覚悟をしておくようにと話があった。

そして最期の日。あなたは皆に見守られて天国に旅立った。

その瞬間の2時間前の出来事を私は誰にも話していない。

私だけが部屋にいたときにあなたは「ぼくちゃん、涙の数だけ生きなさい。」と言った。私は手を握り「ありがとう」と伝えた。あなたは「ほっほっほ。」と笑った。

あなたのお蔭で私は、この仕事の尊さを改めて感じた。

そして気付いた、介護の仕事が天職だと。この仕事が大好きだ。